

モンゴル騎兵に関する日本語の歌：  
軍人民族主義者たちの覚醒 (交感するアジアと日本)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008157">https://doi.org/10.14945/00008157</a>

# モンゴル騎兵に関する日本語の歌

## —軍人民族主義者たちの覚醒—

楊 海英

### 目次

はじめに

- 1 モンゴルの近代的な騎兵
- 2 成吉思汗の出征歌
- 3 「蒙古軍人の歌」

おわりに

### はじめに

19世紀後半から燃え上がった西欧列強の反植民地闘争の精神について、ベネディクト・アンダーソンはつぎのように指摘する。

ナショナリズムをめぐる表現の中核には、屈辱的な現在の背後に隠れている過去の栄光を甦らせようとする民俗学者、歴史家、辞書編纂者、詩人、小説家、音楽家の不断の努力があった。

ナショナリストたちの多くはまた故郷を離れて異国の地を旅し、そこで生活をし、教育をうける。彼らは未知の言語を取得し、自由主義者やアナークストたちの新聞と冊子を読み、ナショナリズムや国際主義の思想を構築していく<sup>1)</sup>。モンゴル人も例外ではない。アジアの大半の民族が西洋の植民地からの解放を目指していたのに対し、モンゴルは古い帝国シナ<sup>2)</sup>からの完全な自立を民族の最終的な目標に掲げていた。中国人すなわち漢民族が万里の長城を超えてモンゴル人の草原に闖入し、植民村落を開拓していったからである<sup>3)</sup>。そのために、モンゴル人たちは「過去の栄

---

<sup>1)</sup> アンダーソン・ベネディクト『三つの旗のもとに—アナークイズムと反植民地主義的想像力』, NTT出版, 2012年, 131頁, vi.

<sup>2)</sup> ここで用いるシナとは、歴史学者の岡田英弘の近著『シナ（チャイナ）とは何か』（藤原書店, 2014年）にしたがったものである。なお、岡田英弘の学問的な見解はユーラシアの遊牧民たちの見解と一致している。楊海英『ジェノサイドと文化大革命』, 勉誠出版, 2014年。

<sup>3)</sup> Li Narangoa and Robert Cribb, 2003, *Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945*, pp. 1-22, London and New York: Routledge Curzon. リ・ナランゴア「モンゴル人が描いた東アジア共同体」松浦正孝編『アジア主義は何を語るか—記憶・権力・価値』, ミネルヴァ書房, 2013年, 146-163頁。

光を復活」させようとして西洋列強のロシアとも、アジアの新興帝国にして「他の仲間たちを圧政から解放する」と標榜していた日本とも手を組んだ。シナの植民地からモンゴル民族を解放しようと先導したのは、近代化された騎兵である<sup>4)</sup>。

遊牧民のモンゴル人の近代的な騎兵戦術は日本から学んだ。大勢のモンゴル人青年が日本の陸軍士官学校に留学して帰国・帰郷し、民族独自の軍隊を統率した。日本もまた彼らを鼓舞しようとして、多くの歌を作った。本報告はそのうちのいくつかを紹介する。

## 1 モンゴルの近代的な騎兵

### 近代的な騎兵の発祥

モンゴルの近代的な騎兵は1904年に日露戦争中に日本軍の案内役をつとめたバボージャブ（1875–1916）将軍の馬隊に起源を発する。バボージャブは1912年に新生のボグド・ハーン政権に馳せ参じて全モンゴルを解放しようとの固い意思を示し、鎮国公の爵位を授与された<sup>5)</sup>。彼が南モンゴルで戦死したあと、三人の息子と娘はアジア主義者の川島浪速によって日本に連れてこられた。そのうち、次男ガンジョールジャブと三男ジョンジョールジャブは日本陸軍士官学校を卒業後に満洲国軍に任官した。ガンジョールジャブは一時、陸軍興安軍官学校の校長をつとめていたし、ジョンジョールジャブはハイラルに駐屯する興安軍第十軍管区の少将参謀長のポストにいた<sup>6)</sup>。

日本が南モンゴルから撤退したあと、興安軍内のモンゴル人部隊と興安軍官学校の生徒たちが中心となって、東モンゴル人民自治政府の武装勢力となる。当時は「東モンゴル人民自治軍」と称され、五個の騎兵師団からなっていた。東モンゴル人民自治政府は准国家の体制を整えていた。いわば、日本統治時代にモンゴル人たちが静かに推進して形成された准国家である。五個の騎兵師団も日本軍から脱皮したものである。バボージャブ一家は、近代モンゴル騎兵の生みの親であると評価しているし、モンゴル人の近代化を語る時に、騎兵はひとつの装置であると指摘できよう。というのも、尚武の民族であるモンゴルのナショナリストたちの主流を成していたのも騎兵出身の軍人たちだったからである<sup>7)</sup>。

五個の騎兵師団はのちに中国共産党の凄まじい政治的な粛清を経て、内モンゴル

4) 楊海英『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』（上・下）、岩波書店、2009年。同『チベットに舞う日本刀—モンゴル騎兵の現代史』、文藝春秋、2014年、47頁。

5) 烏蘭塔娜「ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向—バボージャブを例として」『東北アジア研究研究』12、2008年。

6) 満洲国軍刊行委員会編『満洲国軍』、蘭星会、1970年、629頁、784頁。

7) 前掲楊海英『チベットに舞う日本刀—モンゴル騎兵の現代史』。

人民自衛軍、内モンゴル人民解放軍騎兵、中華人民共和国国防騎兵、内モンゴル軍区騎兵第五師団へと改編されていく。文化大革命が1966年5月に発動されると同時に、騎兵第五師団も直ちに解散された。独自の武装勢力を失ったモンゴル人たちは中国政府と中国人が主導したジェノサイドの犠牲者となっていったのである<sup>8)</sup>。

## 興安軍官学校

モンゴル人たちがもっとも愛した陸軍興安軍官学校は1934年7月1日に鄭家屯で開校した。一期生は72名で、数千人のなかから選ばれたエリートたちである。興安軍官学校は満洲国のモンゴル人地域だけでなく、西隣の徳王の蒙疆政権にも絶大な人気を誇っていたし、モンゴル人民共和国からの亡命者も入学していた。あるモンゴル人によると、興安軍官学校は途中から年に二回生徒を募集するようになり、1945年の終戦時には第15期生が108人も入学していた。13歳から17歳の少年たちだった。講義はすべて日本語とモンゴル語からなり、8年制だった<sup>9)</sup>。

1945年8月11日、同校の生徒たちの数人は日本人教官に銃口を向けた。日本側はこの事件を「興安軍官学校の潰滅」と呼び、中国に生きなければならなかったモンゴル人たちは「対日起義」と表現しつつも、政府に正式に認可されたのは1999年のことである<sup>10)</sup>。

「蒙古復興を熱する」興安軍官学校には二種類の校歌がある。作家で、元日銀の副総裁だった藤原作弥の父親藤原勉は興安軍官学校の国語すなわち日本語の教授だった。藤原作弥も小学校時代のひとときを興安街（王爺廟）で過ごした。藤原作弥の記憶である<sup>11)</sup>。

興安街の春は六月にやってくる。五月、洮兒河の氷が解けはじめると、流水とともに楊柳の若芽とネコヤナギがふくらむ。……そして六月のある日、突然のように広野は若緑に一変する。七月、見はるかす草原は花園のようだ。……遊羊がのどかに草をはみ、放牧の蒙古馬が野山を駆けめぐるのは七月から八月にかけてである。

ときおり、興安街で軍官学校の生徒隊の行軍にであう。「父が行進曲を口笛で吹き、ウーテン・バクシが、それに合いの手を入れる」。すると、「その学生たちが、ラッ

8) 前掲楊海英『墓標なき草原』（上・下）、『ジェノサイドと文化大革命』。

9) 湖泊 吉儒木図「風雨飄搖 奮勇起義—興安軍官学校第15期生参加“八・一一起義”歷程」巴音図胡格編『8・11 葛根廟起義』、内蒙古人民出版社、2001年、161-166頁。

10) 前掲楊海英『チベットに舞う日本刀—モンゴル騎兵の現代史』。

11) 藤原作弥『満洲、少国民戦記』、社会思想社、1995年、49頁。

パ手のリードで、父たちの口笛と同じメロディーを声高らかに合唱し、歩調を合わせ」た<sup>12)</sup>。藤原作弥副総裁をして終生にわたって忘却させない「陸軍興安学校校歌」の歌詞は以下の通りである<sup>13)</sup>。

#### 陸軍興安学校校歌

アジアの朝は今明けて 大興安の嶺高く  
八紘照らす旭日を 仰ぐ我等の胸は鳴る

天王山洮児河 風雲呼べる学舎に  
血潮は赤く燃え立ちて 集う蒙古の健男児

厳寒なんぞ炎熱も 凛々たりやこの気魄  
興安軍の精鋭を永久に培う力なれ

耀く歴史忠誠の 勇武を誇る民族なれば  
陛下の厚き信頼に 応え奉らん我等こそ

世紀の嵐吹かば吹け 精励刻苦業終えて  
断乎と征かん西の方 使命厳たり鉄騎兵

歌詞のなかの天王山と洮児河は興安街の近くの山河の名である。歌は「興安軍の精鋭」となるよう、「勇武を誇る民族」の青年たちを励ます内容からなっている。一方、『蒙古大観』が記録した歌詞はつぎのようなものである<sup>14)</sup>。

#### 興安軍官学校校歌（法王進軍の曲）

光芒燦たり 互映隕つ 肝脳共に塗れしを  
凶南の雄図偲ぶとき 今も高鳴るこの血潮

日出づる国に三千年 秘めし正義の焰やき  
世界の闇を照らすべく 蒙古男児の燃ゆる哉

あゝ繚乱の桜花 蘭もひとしく薫るなる

---

<sup>12)</sup> 藤原作弥前掲書，53-54頁。

<sup>13)</sup> 前掲『満洲国軍』。

<sup>14)</sup> 財団法人善隣協会編『蒙古大観』，改造社，1938年，270頁。

吾学園に朝日さし 英雄靈もかけるらむ

劫火の光闇にうく ヒマラヤの峰仰ぎつつ  
降魔の剣かざすとき 駒の勇むを如何にせん

法王の軍健男子 法鼓一度とどろきて  
倫寶一度めくるとき 四方に仰がん 日の光

まず、この校歌がまた「法王進軍の曲」とも呼ばれていたことに注目しよう。チベット仏教の世界において理想とされる政治の在り方は、仏教に帰依した人格者の転輪聖王が武力ではなく宗教の教えによって治世にあたることである。モンゴル帝国時代のフビライ・ハーンとその継承国家の清朝の皇帝たちはそのように演出していた<sup>15)</sup>。モンゴル人の興安軍官学校も満洲国の皇帝に忠誠を尽くすことになっていたので、ここでいう「法王」は溥儀を指していると理解できよう。

上の「法王」との表現にはまた日蓮宗の色彩が含まれている可能性もある。実際に興安軍官学校に勤務したことのある元教官は以下のように回想している<sup>16)</sup>。

興安軍官学校は金川（耕作）顧問の立案により創設されたもので、金川顧問が直接指導にあたった。……内務教育において、宗教心涵養のため班内に仏壇が安置され、朝夕礼拝読経し、食事前には「米粟一粒、冷水一滴も蒙古民族興隆の原動力たらん」と合唱唱和し、蒙古民族の復興を祈念していた。……金川顧問は田中智学師の日蓮宗派に属し、法華経を極め、石原莞爾將軍を尊敬し、その配下の人物であった。

このように、強烈な民族主義的思想を中和する作用を期待して、日蓮系統の仏教思想を併用していたことが分かる。モンゴル人の独立精神を抑制するための「法王」が用いられていた可能性がある。

私はまた上の歌詞のなかの「ヒマラヤの峰仰ぎつつ、降魔の剣かざすとき、駒の勇むを如何にせん」とのくだりに「先見性がある」と感動を覚えた。というのも、のちに人民解放軍の騎兵となった彼らは、1958年から1961年までチベットに遠征し、「叛乱」したチベット人を弾圧する先兵となっていったからである<sup>17)</sup>。

---

<sup>15)</sup> 石濱裕美子『清朝とチベット仏教—菩薩王となった乾隆帝』、早稲田大学出版部、2011年。この歌詞のなかの「法王」や「法鼓」などをめぐる解釈については、知人の河村俊明氏との議論で有益な示唆を得た。

<sup>16)</sup> 戒能伍郎「興安軍簡略史」蘭星興安会『私達の興安回想』1999年、17-22頁。

<sup>17)</sup> 前掲楊海英『チベットに舞う日本刀』。

## 2 「成吉思汗の出征歌」

南モンゴルの西部、満洲国の西に蒙疆政権があった。その首都の張家口に住む日本人たちは「張家口の会」をつくっていた。「張家口の会」会長である北川昌が国立民族学博物館の小長谷有紀に「聖、成吉思汗の歌」を提供した。「聖、成吉思汗の歌」は以下のような歌詞からなる<sup>18)</sup>。

アルバントムンチリグイ  
十萬の精銳軍をひっさげて  
アヂヤ洲をば征服せん  
奮闘せよ！遠征軍の兄弟達よ  
十萬の郷土軍よ！奮戦あれ

二十萬の精銳軍をひっさげて  
南北二国（世界）を征服せん  
ホンゴル・シクル・グッチン・テグスの四英雄よ  
二十萬の精兵をもって速やかに戦勝を期せ！

北川昌はこの歌の思い出を小長谷有紀につきのように語っていた<sup>19)</sup>。

私たちは内蒙古でどれだけかの月日、年月を過ごしてきたわけではありませんが、まず最初に覚えたのがこのチンギス汗の歌でした。そして日常生活の中で時に触れ、折にふれてこのチンギス汗の歌を口ずさんだものでした。

北川昌ら張家口在住の日本人たちに愛されていた「聖、成吉思汗の歌」とまったく同じ歌詞の歌を別の日本人は「チンギス・ハガン・タイルクスン・チリグン・タゴト（成吉思汗出征ノ歌）」と呼んでいた。こちらは、都竹武年雄が小長谷有紀に提供したものである。この「チンギス・ハガン・タイルクスン・チリグン・タゴト（成吉思汗出征ノ歌）」は「伏見三男人編曲 歌詞ハチャハル・モンゴル語を標準トス」とあるが、小長谷は歌詞の内容について分析した上で、「日本人の主導によってモンゴル人とともにつくったのではないかと思われる」と指摘する<sup>20)</sup>。

蒙疆政権に属していたチャハル・モンゴルの武殿林は別の伝承を記録している。

<sup>18)</sup> 小長谷有紀「チンギス・ハーン崇拜の近代的起源—日本とモンゴルの応答関係—」『国立民族学博物館研究報告』37巻4号，2013年，441頁。

<sup>19)</sup> 小長谷有紀前掲論文，440頁。

<sup>20)</sup> 小長谷有紀前掲論文，440-442頁，361頁。

「成吉思汗出征の歌は、チンギス・ハーンの直系子孫たちのあいだに伝わる歌で、家系譜とともに代々、暗記してきたものである」、という<sup>21)</sup>。武殿林は歌詞については特に触れていない。

一方、1945年5月に満洲国の索倫旗<sup>ソロン</sup>を旅行した東京帝国大学の飯塚浩二は旗長が旗公署で催した晩餐会で、「成吉思汗出征の歌」を聞いたという<sup>22)</sup>。

モンゴル系が口を揃えて、「アルバン・トモン」云々の『成吉思汗出征の歌』を合唱。印象的な、いいメロディである。……古くからカラチン族のあいだで行われていた歌だということをあとで友人から聞いた。日本で音盤が発売されたことがあるという。欲しいと思う。

飯塚はなぜか、日本の軍歌を想起していない。彼は、「例の〈アルバン・トモン云々〉のチンギス汗遠征の歌にしても、酒宴たけなわなるに及んで黒田節が登場する程度の即興にとどまっている」、とうけとめている。

冷静な飯塚教授と異なり、実際に前線にいて敗戦を経験した日本人は別の記憶を留めている。1945年8月9日からソ連軍のマリノフスキー大将が率いるザバイカル方面軍とモンゴル人民共和国軍がゴビを縦断して南モンゴルに入る。当時、満洲国の林西に駐屯していた騎兵四八団はモンゴル人の包団長と志賀野副官らに引率されてシラムレン河沿いに駐屯していた。騎兵団の最期は悲壮感に包まれていた。

9月1日、再びシラムレン河に出た。河の畔で、日蒙軍官全員が集まり作戦会議が行われた。……団長の号令で部隊全員団旗に最後の敬礼の後、団長自ら火をつけた。夕陽が西に傾く中、団旗はまたたく間に焰になっていった。軍官も兵士も皆が溢れる涙を払おうともせず、完全に火が消えてしまうまで黙って見送った。

「俺達の先祖は源義経だ」

酒に酔うと軍刀を振りかざし蒙古の軍歌を唄った機関銃連長は「俺達は今迄に漢民族に虐められてきた、これを機に仇を討つ」

と氣勢を上げ、……「アルブントムン、チルゲンディスチュン」と勇敢なる祖先ジンギスカンの歌を唄いながら砂漠の彼方に去っていった<sup>23)</sup>。

モンゴル人は何かがあると、すぐに唄いだす。悲しいときも嬉しいときも同じで

<sup>21)</sup> 武殿林「正黄旗総管巴彦孟克」『察哈爾史跡』、内蒙古文化出版社、2004年、249頁。

<sup>22)</sup> 飯塚浩二『飯塚浩二著作集10 満蒙紀行』、平凡社、1976年、284-289頁。

<sup>23)</sup> 森邊章「砂漠に消えた騎兵四八団 II」蘭星興安会『私達の興安回想』、1999年、83頁。

ある。上で示した場面のように、モンゴル人たちは極めて困難なときに『チンギス・ハーン遠征歌』に大いに励まされていたのである。

ソ連とモンゴル人民共和国軍によって解放され、日本軍が草原から撤退したあとのモンゴル人たちは清朝末期以来の宿願である民族の統一と合併を熱望していたが、大国同士で勝手に結んだ「ヤルタ協定」でその夢は頓挫した。大勢の民族主義者たちをばぐくんだ興安官軍学校の教官と生徒たちを中心に、1945年秋に興安城防司令部が設置され、民警大隊が組織された。のちの騎兵五個師団の祖形である。騎兵第一師団の参謀長となるドグルジャブは当時の様子をつぎのように回想している<sup>24)</sup>。

私たちは城防司令部に行って、三五〇挺の銃とひとり二〇〇個の弾をもらってきた。銃剣を付け、軍用ヘルメットを被ってからは整列して王爺廟を元気よく行進した。『チンギス・ハーン遠征歌』を威風堂々と合唱した。

このように、民族の存亡にかかわるたびに、モンゴル人騎兵たちが熱唱していたのが、『チンギス・ハーン遠征歌』である。その後、内モンゴル人民革命党と騎兵たちは「東モンゴル人民自治政府」を樹立し、モンゴル人民共和国との統一合併を目指す民族自決の活動を開始したのである。

南モンゴルは1949年から中華人民共和国の一自治区に変身した。自治区の最高指導者だったウラーンフーもまた『チンギス・ハーン遠征歌』が好きで、北京から視察に訪れた中国人の政治家たちにもこの曲を演奏して聞かせていた<sup>25)</sup>。

### 3 「蒙古軍人の歌」

東京の恵比寿に建つ防衛研究所戦史研究室に「蒙古軍人の歌」がある。詠み人知らずの歌であるが、歌詞は以下の通りである<sup>26)</sup>。

一 偲べ、我がモンゴルの同胞よ、過ぎにし年の吾等の日  
恨みなるかな 長夜の眠り  
安易を求め 難を忌み  
進み行く世に 背きたる  
六百餘年の 衰亡史

<sup>24)</sup> 伊河、烏雲、納日松整理『都古爾扎布回憶録』、内蒙古大学出版社、2007年、120頁。

<sup>25)</sup> 楊海英編『内モンゴル自治区の文化大革命7—民族自決と民族問題』（モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料）、風響社、33頁、2015年。

<sup>26)</sup> 資料の整理番号は「満洲・満蒙、No. 108」。

西に東に 吾が故地は  
他国よそくにのごと 途を閉ぢ  
南に北に 同胞ほらがらは  
仇人あだひとのごと いそしまず  
赤魔はすでに 北を犯し  
南隣もまた 義に背き  
モンゴル族の 命運は  
げに累卵の 危機にあり  
慷慨時事の 非を嘆く  
孤高の志士の 影寒さ  
此ときの秋にして 日本ひのもとの  
起義の戦い 知は満洲  
興安の同胞 雲を得て  
二万の鉄騎 競ひ集い  
内蒙自治の 日光旗  
モンゴル族に 生氣湧く  
苦闘半歳 春廻かへり  
五族協和の 仁光は  
鉄騎の群れに 降り注ぎ  
興安建軍 ここに成る

二 奮へ、我がモンゴルの同胞よ、今日の吾等の姿見よ  
善隣きの誼を 毀そこないて  
赤魔白禍に 民四億  
塗炭きらめの苦に泣く 大陸に  
再び閃く 布義の剣  
永久とわの平和を 築かむと  
征師再び 海渡り  
満洲起義の 思い出を  
越えて六年むつとせ 秋とき来たる  
壮勇一万 月光旗  
故地ホワゴトを 復すれば  
西、包頭も 定まって  
鞍上の将 意義驕る  
復興基地に 駒進め

道尚遠き 今にして  
綾衣の佳人 街に充ち  
錦衣の驕児 出でんとす  
見ずや、外蒙 新疆の  
同胞のみかは その昔  
汗の幕下に 睦みたる  
回紇の族 皆ともに  
赤魔の笞の 下に伏し  
安き日もなき 明け暮れを  
東の光りを 一と筋の  
憧れとして 忍びあり

### 三 誓へ、我がモンゴルの同胞よ、明日の我等の精進を

健馬一夜に 百里を駈り  
一弾必ず 一敵斃す  
成吉思汗の 後裔は  
華衣を卑しみ 美味を捨て  
ひたすら励む 武士の業  
励む吾等に 歡喜充ち  
喜怒哀楽に 表裏なく  
義のあるところ 火をも踏む  
成吉思汗の 後裔は  
財を求めず 利に就かず  
ひたすら尚ぶ 心の誠  
羊皮の蒙民 湧く血汐  
薩彦の寒さも よく凌ぎ  
蒙塩羊肉 我れ健剛  
今漠南に 箒執るも  
明日漠北に 戦はん  
弓馬槍劍 祖宗の誉れ  
祖宗の誉れを つたえつつ  
精鋭機銃 吾等の技  
一人の友 倒れなば  
進みて倒す 敵十騎

安らかなれや 友の<sup>たま</sup>霊  
成吉思汗の 後裔の  
戦場の誼は ここにあり

このように、歌はまずモンゴルは安易を求める民族に転落したとし、「長い眠り」からの覚醒を促そうとしている。「興安建軍、ここに成る」とあることから、満洲国建国後に興安軍が成立した時期に合わせて作られた可能性もあろう。「赤魔」と「白禍」は共産主義と白人優越主義を指し、日本のアジア主義者たちが掲げていた西洋の植民地支配からアジア諸国を解放するという思想と運動を想起させる<sup>27)</sup>。

## おわりに

スウェン・ヘディンが組織した西北科学考察団に参加していたハズルンド・クリテンセンは1928-1929年に内モンゴル西部で、1936-1937年には内モンゴル東部で91曲の歌謡を録音している。そのうちの30番と44番はともに「父チンギス」と題するものであるが、小長谷の分析によると、いずれも日本の軍歌「戦友」とほぼ同じメロディだという。軍歌「戦友」は1905年の日露戦争時から愛唱されてきたが、それが「父チンギス」になると、「哀愁を感じさせるメロディは、明るく変わっている」<sup>28)</sup>。

日本の歌がモンゴルの歌<sup>ド-</sup>になっていく事例はほかにもある。多梅稚作曲、大和田建樹作詞の『鉄道唱歌』がモンゴル人民共和国の『女たちの歌』に変化していったことは広く知られている。同国では、「モンゴルの若者たちが親しみやすいメロディーで歌えるように創作され、1929年にツェレンルハムが作詞し、女性解放を謳歌した社会主義の歌だと理解されている」。「鉄道唱歌」がモンゴル高原に伝わったことについては諸説がある。1917年のロシア革命後に、日本がシベリアに出兵したことで、大勢の日本人女性が北アジア各地に進出した。日本軍の撤退後、女性たちはモンゴル高原に滞在し、望郷の気持ちで『鉄道唱歌』を歌っていたのではないか。あるいは、満洲の興安嶺を超えてステップに広がっていった可能性もある<sup>29)</sup>。

モンゴルの場合、騎兵は単なる戦闘のための軍人ではない。彼らは覚醒した民族主義者の集団であり、民族自決を獲得しようとして常に植民地解放の最前線に立っていた。したがって、「興安軍学校校歌」や「蒙古軍人の歌」もまた熱きモンゴル人

<sup>27)</sup> 松本佐保「白人優越主義へのアジア主義の対応—アジア主義の人種的連隊の試みと失敗」松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか—記憶・権力・価値』、ミネルヴァ書房、2013年、212-254頁。

<sup>28)</sup> 小長谷有紀前掲論文、437-439頁。

<sup>29)</sup> 楊海英「日本人のモンゴル学—〈知の近代化〉へ貢献」『静岡新聞』、2013年9月18日。

青年たちの民族自決の精神を醸成するのに機能していたと評することができよう。

## 参考文献

### 日本語文献

アンダーソン・ベネディクト

2012『三つの旗のもとに—アナーキズムと反植民地主義的想像力』, NTT出版.

飯塚浩二

1976『飯塚浩二著作集10 満蒙紀行』, 平凡社.

烏蘭塔娜

2008「ボグド・ハーン政権成立時の東部内モンゴル人の動向—バボージャヴを例として」『東北アジア研究』12, 97-118頁.

岡田英弘

2014『シナ（チャイナ）とは何か』, 藤原書店.

戒能伍郎

1999「興安軍簡略史」蘭星興安会『私達の興安回想』, 17-22頁.

小長谷有紀

2013「チンギス・ハーン崇拜の近代的起源—日本とモンゴルの応答関係—」『国立民族学博物館研究報告』37巻4号, 425-447頁.

財団法人 善隣協会調査部編

1938『蒙古大観』, 改造社.

藤原作弥

1995『満洲, 少国民戦記』, 社会思想社.

松本佐保

2013「白人優越主義へのアジア主義の対応—アジア主義の人種的連隊の試みと失敗」松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか—記憶・権力・価値』, ミネルヴァ書房, 212-254頁.

満洲国軍刊行委員会編

1970『満洲国軍』, 蘭星会.

森邊章

1999「砂漠に消えた騎兵四八団 II」蘭星興安会『私達の興安回想』, 81-88頁.

楊海英

2009『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上・下), 岩波書店.

2013「日本人のモンゴル学—〈知の近代化〉へ貢献」『静岡新聞』9月18日.

- 2014『ジェノサイドと文化大革命—内モンゴルの民族問題』勉誠出版.  
2014『チベットに舞う日本刀—モンゴル騎兵の現代史』, 文藝春秋.  
2015『内モンゴル自治区の文化大革命7—民族自決と民族問題』(モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料), 風響社.  
リ・ナランゴア  
2013「モンゴル人が描いた東アジア共同体」松浦正孝編『アジア主義は何を語るか—記憶・権力・価値』, ミネルヴァ書房, 146-163頁.

#### 中国語文献

湖泊 吉儒木図

- 2002「風雨飄搖 奮勇起義—興安軍官学校第15期生参加“八・一一起義”歷程」  
巴音図 胡格編『8・11葛根廟起義』, 内蒙古人民出版社, 161-166頁.

武殿林

- 2004「正黄旗総管巴彦孟克」『察哈爾史跡』, 内蒙古文化出版社.

伊河, 烏雲, 納日松整理

- 2007『都古爾扎布回憶録』, 内蒙古大学出版社.

#### 英語文献

- Li Narangoa and Robert Cribb, 2003, *Imperial Japan and National Identities in Asia, 1895-1945*, London and New York: Routledge Curzon.